

東京フィルハーモニー交響楽団

第92回東京オペラシティ定期シリーズ

今月の定期は3日共、小林研一郎が登壇、協奏曲と交響曲を指揮した。まずは掘米ゆず子のソロによるモーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第3番ト長調K216。少編成に落とし目の演奏だったが古楽奏法には目もくれぬコバケンだけに響の薄さも感じさせず、ソリスト共々極上の愉悅を奏で、実に軽やかで瑞々しいモーツァルトを創り出していった。掘米のアッコールはバツハ「ガヴォット」。

後半はコバケンの十八番でもあるベルリオズ／幻想交響曲。十八番だけにマンネリ化を防ぐためか毎回様々な新機軸を工夫し加味して来るのがマエストロの常である。今回も序奏の抒情性からして実に豊穡かつ鮮烈。低弦に強いアクセントを付けるのもいつも通りで決りに決り抜いた快演だった。フィナーレは正にサバトの狂宴で、最終場面もスル・ポテンティチェロなどの特殊奏法を強調。作曲家の意図した蛆虫をピチピチ飛ばしながら踊る骸骨のイメージもバツチリ出ていた。(3月12日、東京オペラシティ) (浅岡弘和)

東京交響楽団

第628回定期演奏会

音楽監督ジョナサン・ノットの指揮で、ベルクの「抒情組曲」(弦楽合奏版)とワーグナーの「パルジファル」(抜粋版)とが披露された。

「抒情組曲」には対位法的な部分が多いが、ノットは内声を厚く響かせ、埋もれがちな声部の存在感を保つ。終楽章「情熱のアダージョ」の結尾、全音階がちの下行音形が浮き立って聴こえてきたのは重要だ。この下行音形はこの日の鍵、「パルジファル」の要所で「信仰の動機」として使われる。だから後半、この音形が登場した瞬間、前後半の回路がしつかりとつながる。こうしてプログラムは、信仰の掘り下げを芯として一体性を強めた。その意味で復活祭前、四旬節の季節にふさわしいカップリングだった。

「パルジファル」に登板した独唱陣の活躍もまぶしい。とりわけ標題役のテノール、クリスティアン・エルスナーは、言葉をまことに繊細に扱いつつも、それを大きな身体いつぱいに響かせる。相反する表現の方向をきれいに統合していた。(3月14日、サントリーホール) (澤谷夏樹)

芸劇ウインド・オーケストラ

第1回演奏会

東京芸術劇場が2014年からプロ音楽家の育成事業として「芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー」を発足させたが、この日はその1期生38名による初の正式なお披露目となる。曲順が遡るが、この日のための委嘱作品である3曲目の権代敦彦「Time No Longer」では、このような新作にも順応できるポテンシャルが垣間見え、また2曲目の三善晃「クロス・バイ・マーチ」のような聴く分には難解ではないが演奏は難しいという現代曲でも、技術と意識の共有が図られていた。問題は冒頭のメンデルスゾーン「吹奏楽のための序曲」のような特段の難技巧を要しない古典作品であり、ここでは逆に型にはまったものわがりの良さの鎮座に終始する。後半のチャイコフスキーのバレエ曲にも同様のことがいえるのだが、これこそ基礎力が本物か否かを問われるところであり、井上道義の指揮に比べ得るだけの耐性を習得するに足る、今後での様々な試みを期待したいと思う。(3月13日、東京芸術劇場) (木村貴紀)

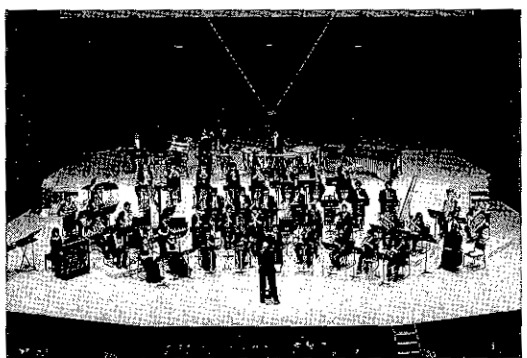
東京ニューシティ管弦楽団

第98回定期演奏会

いつも画期的なプログラムで楽しませる東京ニューシティ、今回も期待を裏切らなかつた。指揮は当団名誉音楽監督の内藤彰、オルガン奏者には、即興演奏でも評価の高いオルガン界の鬼才、カレヴィ・キヴィニエミが迎えられた。

プーランク「オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲」は、演奏される機会が少なく今回初めて生演奏を聴いた。立体的な音響によって荘厳さと神秘性が強められ、プーランク特有のウィットに富んだモチーフの反復に表現の工夫がなされ大いに楽しめた。オルガンのアンコールはコレリリの「ラ・フォリア」を即興し、多彩なオルガンの技術を駆使した創造性溢れる演奏だった。

後半のメンデルスゾーン「交響曲第2番『讃歌』」では東京合唱協会も参加。終始、高貴さを漂わせる清らかな響きで、終盤にかけての壮大な神への賛美が印象的。繊細な和声進行を巧みに惹き出し、アカペラ部分でも整えられた響きを作った。(3月14日、東京芸術劇場) (生田美子)



芸劇ウインド・オーケストラ

東京ヴィヴァルディ合奏団

Viva Vivaldi Voice

ベリッシモの『お菓子の恋』

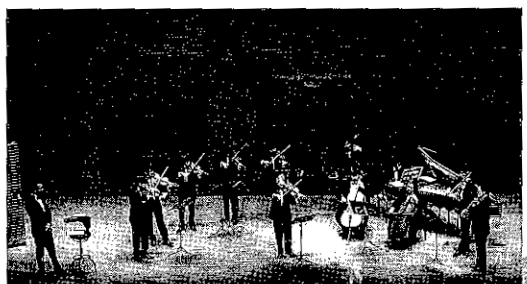
この団体は、ヴェルディ「椿姫」前奏曲のような内容を暗示する楽曲で徒にその色を強調しないが、ロッシ二の「弦楽のためのソナタ」第2番では明朗としか表す言葉がない楽曲そのものを存分に聴かせる。それはソリストに藤原浜雄を迎えたヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲「恋人」にも顕著で、この楽曲の喜ばしさが藤原の折り目正しさを示され、ま

新日本フィルハーモニー交響楽団

第537回定期演奏会

客演指揮は今回初共演となるハルトムート・ヘンヒェン。彼は後期ロマン派の解釈で高く評価されているとのこと。そこでオール・モーツァルトの演目を彼がどう料理するのかに着目した。曲目は後期二大交響曲。まずは《第39番》。主題とそれ以外の部分とを対照させる能力には感服。それは続く《第40番》も同じ。ところが、不思議なことに休憩後の《第41番》では第1ヴァイオリンに変化が。休憩前の2作品での「対照と激情」がすっかりな

りを潜め、音量を抑え気味に。休憩中に何らかの指示があったのか。また、ジュピター主題のフーガの表現が不明確。対位法の表現がいまひとつなのは《第40番》でも垣間見えていた。ということは、ヘンヒェンはポリフォニーの表現が苦手なのか。何れにせよ、彼の指揮ぶりがそのまま音楽表現になっていた点からするとオケはその術中にハマったことになる。その意味からすればヘンヒェンのオーラは大したものといつてよいだろう。(3月15日、サントリーホール) (中村 靖)



東京ヴィヴァルディ合奏団

た団がそれを柔軟に共有した。「ゴッドファーザー愛のテーマ」でも、映画音楽という範疇を越えた真実味を感じさせたし、ヴィヴァルディの「四季」からの「春」と「夏」の特に「夏」では、描写を標榜しなくとも夏の厳しさを炙り出すという恐るべき事例を示して、この人たちの矜持が安易なムードを退けた。しかしそのような硬派な演奏に比して、全体的にはベリッシモ・フランチェスコのMCを配した和やかさの中で進められた演奏会だった。(3月14日、アニエリホール) (木村貴紀)

世田谷交響楽団メモリアルコンサート

政治家に転身するまではアマオケ界にその人ありと知られた上杉裕之氏が急逝して一年。コバケンの右腕、番頭役としても大活躍した氏が創設しマエストロと共に数々の名演を成し遂げた世田響が活動を停止してからも十年が経過。その後様々なアマオケの源流ともなった同オケと上杉氏の功績を記念し演奏会が開かれた。まずは所縁の指揮者久保田悠太香と木野雅之によるプロコフィエフ／ヴァイオリン協奏曲第1番。この日コンマスに入った未亡人理香さんの師でもあり氏と一番親交の深かった木野だけに超絶技巧が冴えに冴えた。

次は90年9月の旗揚げ公演の指揮者だった金子建志氏が登壇。演目も25年ぶりのマラー「第9」で、優秀な弦と相まってこれまた追悼の夕べに相応しい名演となっていた。トリは特別出演小林研一郎のモルダウ。絶えることのない川の流れるように、まるで上杉氏の魂の永遠の水のいのちへの転生を願うかのようにしめやかに演奏された。(3月15日、府中の森芸術劇場) (浅岡弘和)